

## 神は愛

マタイによる福音 5:1-12a

(そのとき、) イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。

「心の貧しい人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は、幸いである、

その人たちは慰められる。

柔和な人々は、幸いである、

その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人々は、幸いである、

その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は、幸いである、

その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人々は、幸いである、

その人たちは神を見る。

平和を実現する人々は、幸いである、

その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。」

### 説教

マタイの山上の説教の八福の教えでを朗読しました。有名な聖書箇所でここ

が好き、という方も大勢いることだと思います。きょうは小説『人はなんで生きるか』（トルストイ著、岩波文庫、あすなろ書房）からトルストイ流八福の解釈を紹介します。

ある日、神様は天使に一人の死にそうな女の魂を天国に連れて来るよう命じます。しかし、その女は生まれたばかりの双子の女の子を抱えており、しかも夫は死んでいません。女は今自分が死ぬとこの子たちを育てる者がいないので、天使に魂を取らないでと嘆願します。天使はかわいそうになって魂をとらずに天国に帰ってしまいます。すると神様はおこり、その天使に次の3つの言葉の意味が分かるまで天に帰ってくるなと言います。

「人の中には何があるか。」

「人には何が与えられていないか。」

「人は何によって生きるか。」

地上に墮とされた天使は礼拝堂の壁にはだかで寄りかかり半死半生の状態です。そこに貧しい靴屋が通り過ぎ去りますが、彼はかわいそうにおもい引き返し、はだかの男に自分の服を着せて家に連れ帰ります。靴屋の妻は食うや食わずの生活の中、夫が見知らぬ男を連れてきたので怒っていましたが、やがて気を取り直し男をもてなします。天使は靴屋に住み込みで働くようになりました。

ある日、金持ちの男が来て1年たっても破れない靴を注文しました。しかし、その男の背後には仲間の天使がいて、今晚にも魂が召されることが天使にわかりましたが、人にはそのことがわかりません。

2年目に双子の女の子が一人の女と靴を注文しにやって来ました。その女の子たちは死んだ女の子たちだったのです。近所の女がその女の子を引き取り育てていたのです。

1. 「人の中には何があるか。」

→靴屋夫婦に助けられた天使は「人の中に愛がある」こと知りました。

2. 「人には何が与えられていないか。」

→今晚にも死んでしまう金持ちが靴を注文するのを見て「人には自分には何が必要なのか知る力が与えられていない」ことを悟りました。

3. 「人は何によって生きるか。」

→近所の女に連れてこられた双子を見て「人はだれでも自分自身のことを思いわずらうことによってではなく、愛によって生きる。」ことがわかりました。

「わたしが人間であったときに生きていけたのは、自分で自分のことを考えたからではなく、通りすがりの靴屋さんとそのおかみさんの心のうちに愛があって、わたしをあわれんで、愛してくれたからです。死にゆく人が靴を注文するのを見て、いくら金持ちでも人には必要なものを知る力がないことがわかりました。二人のみなし子が生きていけたのは、みんながその子たちのことを考えてやったからではなく、母親でもない他人の女の人の心のうちに愛があって、その子たちをあわれんでかわいがったからでした。だから、すべての人間が生きていけるのは、みんなが自分自身のことを考えているからではなく、人々の心のうちに愛があるからなのです」 そういいながら天使は天に帰っていきました。

神が望んでおられるのは、人間と一緒に生きることです。人間が生きているのは、自分のことに心を配っているからだというのは、ただ人間がそう思い込んでいるだけに過ぎません。人間はただ愛によってのみ生きるのです。愛の中にいるものは、神の中におり、神がその中にいます。神は愛に他ならぬいからです。

**心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。**

-----